

村の秘祭「ほぐし祓い」
～衆人環境で羞恥クリ責め
& 絶頂公開～

1

「さつき。今年、あんたの番だよ」

「は……？」

祖母は特に表情を変えなかった。お茶を一口飲んで、また縁側の外を見た。

夕飯の片付けが終わったばかりの居間だった。テレビがついていた。母が洗い物をしている音が、台所から聞こえていた。何でもない夜だった。

「ほぐし祓い、知ってるだろ」

知っていた。この村に昔から伝わる慣習で、二十五歳になっても嫁に行けなかった女は体に穢れが溜まるとされ、村で一番力のある若い男に祓ってもらう、という話だった。つまり、セックスをするのだ。子供たちの間で、面白おかしく話題になりそうな話だった。

昔からこの村に伝わる伝統的な儀式だが、時間が経つにつれて形骸化して、今ではもう行われていない、はずだった。さつきはこの儀式をやっているのを知らない。

「……今も、やってるの」

「当たり前じゃないの。十年ぶりだけどね」

台所から母が出てきた。エプロンで手を拭きながら、申し訳なさそうな、でも「仕方ない」と思っている顔をしていた。

「さつきが悪いんじゃないんだよ。縁がなかっただけで」

さつきは何も言えなかった。

25歳の未婚女性がこの村から出るのは、10年ぶり、ということらしい。

「相手は朝日の康平くん。もう話してあるから」

(うそ、でしょ・・・・・・・・)

朝日の康平くん。

子供の頃からずっと近所にいる、二つ上の幼馴染だった。農家を継いでいて、日焼けしていて、誰にでも同じように話しかける人だった。挨拶をしてくれて、時々野菜を持ってきてくれた。派手な女の子と並んでいるところを何度か見かけた。自分とは違う世界の人だと、ずっと思っていた。

もう話してある、と母は言った。さつきが帰省する前から、すでに決まっていた。康平くんは承諾していた。誰も止める気がなかった。止められるのはさつきだけだったが、母と祖母が当然のこととして話し続ける中で、さつきには何も言えなかった。

「明後日の夜ね」と祖母が言った。

さつきは「わかった」と言っていた。気づいたら言っていた。

その夜、眠れなかった。

布団の中で天井を見ていた。祖母も母も、さつきが戸惑うことを最初から想定していなかった。みんなにとってこれは、当たり前のことだった。自分だけが取り残されたように、話が進んでいた。

一方で、あの康平くんと再開して、そして、

「ほぐし祓い、って、康平くんと何するんやろ……………」

と、さつきは無意識に胸を高鳴らせてしまっていた。

翌朝、近所のおばさんが来た。

「十年ぶりだから村也大騒ぎよ。SNSにも書かれてるみたいで、昨日から県外の人も来てるし」

さつきは縁側でお茶を持ったまま、黙っていた。

「しっかりね。すっきりするから」

おばさんは笑顔で帰っていった。

氏神社までの道を、さつきは母と並んで歩いた。

夕暮れだった。山の稜線が赤く染まっていた。道沿いに民家が続いていて、どの家にも灯りがついていた。普通の夕方だった。神社が近づくにつれて、人の気配が増えた。

鳥居の手前に、見物客が集まっていた。十人、二十人、それ以上いるかもしれなかった。折り畳み椅子を持ってきている人がいた。双眼鏡を首からぶら下げている人がいた。カメラを構えようとした人に、村の男性が「撮影はお断りしています」と声をかけていた。

さつきは足が止まりそうになった。

掲示板に書き込みがあったらしい、とおばさんが言っていた。マニアの間では有名な場所で、今年の開催を聞きつけて、遠くから来た人もいると。

母は気にする様子もなく「行きましょ」と言って、鳥居をくぐった。

見物客の視線が、さつきに集まった。ひそひそと声が聞こえた。双眼鏡がこちらを向いた。

さつきは前を向いたまま、母のあとをついて歩いた。足が少し震えていた。

拝殿の脇に、村の長老らしき老人が二人立っていた。さつきの顔を見て、うなずいた。

「では、始めましょうか」と言った。

本殿の横に、小さな部屋があった。普段は鍵がかかっているその部屋の前に、康平くんが立っていた。

日焼けした肌。いつも通り大らかそうな表情だ。さつきと目が合うと、軽く微笑んだ。

「さつきちゃん、久しぶりとね。元気やったか？」

「……うん」

それだけだった。康平くんは扉の方に向き直った。何でもない顔だった。

長老が扉を開けた。櫛と白い布。畳の上に置かれた盃。蝋燭の灯りが揺れていた。

母がさつきの背中をそっと押した。

さつきは、中に入った。

2

村の連合のおじさんと、もう一人の若い衆が、部屋の中にいた。

「さつきちゃんな。洋服を脱いでくれるかのう」

その声に、さつきは息をのんだ。

「え……」

「ここで脱いでもらうんや。儀式はふんどし付けなだめやけえ。」

おじさんは特に感情的ではなかった。事務的に言った。

さつきの指先が冷たくなった。部屋の中に、二人の男性がいる。この部屋の外にも、何人もの人がいる。その目の前で、服を脱ぐ。服を脱がされる。

「えっと、ここで、ですか……………」

「ああ、そうそう。ま、恥ずかしいやろうけど、これからみんなの前でまんこ見られるんだよ。別に今更やろ。」

「え……………！？」

その言葉に、さつきの思考が停止した。

(みんなの前で……あそこを……見られる……?)

村の連合のおじさんの言葉が、ゆっくりと、さつきの頭に染み渡っていく。目の前の風景が、ぐにやりと歪んだ。耳鳴りがした。

「はあ……はあ……」

息が苦しい。胸が苦しい。どうしよう。どうしたらいいの。ここから逃げ出したい。でも、逃げられない。どこにも行けない。

「さつきちゃん。どうせ儀式で脱ぐんやけ、そんな緊張しとらんと。」

おじさんの声が、遠くから聞こえる。

さつきの指が、自分の服に触れた。冷たい感触だった。ボタンのひとつが、外せない。

「よしよし、大丈夫や。わしが手伝ってあげよ」

おじさんが、そっと手を出してきた。

「え、あ…、じ、自分で……………」」 さつきが焦って自分の服に手をつける。

カチッ、という音。一枚目のボタンが外れた。手が震えている。

シャツが開いて、肌が露出する。部屋の冷たい空気が、胸元をなでる。

(や……やだ……。)

目の前にいる二人の男性。その目を感じる。見られている。服の下肌が、じりじりと熱くなる。

「お。肉付きええのう。普段運動しとるんかのう？」

おじさんの視線が、さつきの体をなぞった。

「いえ、そんな……勉強ばかりで……。」

さつきは、震える声で答えた。服を脱ぐという行為が、まるで体の中の心臓をむき出しにされているような気がして、ただひたすらに恥ずかしかった。

「勉強ばかり？ 良い年した女が子供みたいに勉強しとったらあかんけえ。お前はこれから、男の子を産まなあかんのや。もっと体のこと考えなさいや。」

おじさんの言葉は、叱責だったが、特別悪意が込められているようではなかった。ただ、当たり前のことを、当たり前に言っているだけだった。

「でも、肉ついとるから乳とまんこは柔らかくてええな。」

おじさんは、さつきの太ももを撫でた。カサついた手が、肌に直接触れる。そこに触れられた瞬間、さつきは小さく声を漏らした。

「ひっ……！」

「どうした？」

「い、いえ、なんでも……。」さつきは顔を背けた。頬が、火照っているのがわかる。

もう、服は一枚しか残っていない。

下着だけの、丸裸の体。

おじさんの目が、さつきの下着を見つめる。

「さて、と。」

おじさんの手が、下着に触れた。

「や、やめて……っ！」

「あんなあ、これからみんなの前でまんこ見られるんやで。」

その言葉に、さつきは、もう抵抗できなかった。

(見られる……みんなの前にて……まんこを……見られる……)

さつきの脳裏に、その言葉が焼き付いた。

もう、諦めるしかない。

さつきは目をつぶった。おじさんの手が、下着をゆっくりと下ろしていく。股間に風が当たる。

「おお、ええもんやな。」

おじさんの声に、さつきの体が、びくり、と震えた。

裸になったさつきの前に、ふんどしを突きつけられる。白い木綿の、シンプルなものだった。

「ほれ、着けてみろ」

さつきは、震える手で、それを取った。布を体に巻き付ける。冷たい布が、股間に触れる。羞恥で、頭が真っ白になりそうだった。

「やっぱり、若いもんはふんどしの巻き方も知らんのか。」おじさんがため息をついた。

「ほい、わしが絞めたる。」そう言って、おじさんがギュッとさつきの腰にふんどしを巻いていく。

「こんなもんや。」

そして、厚い手でさつきの股間を、ぽんつと叩いた。

「うっ……」

ふんどし一枚の姿。それが、さつきの現在の姿だった。胸が、空気に触れて、少し冷たい。乳首が、硬くなっているのがわかる。

「よし、それじゃ行こうか」

長老が、扉を開けた。外の光が差し込んでくる。騒がしい声が、聞こえてきた。

さつきは、歩き出した。外に出た瞬間、一斉に喧騒に包まれる。

(うっ……!)

目が眩んだ。人の波。それは、人間の海だった。氏神社の境内は、見物客で埋め尽くされていた。数えている余裕はなかったが、100人は優に超えているだろう。狭い空間に、人が人を重ねていた。その全員の視線が、さつきに集まっている。

「来た来た！」

「まじで、ふんどし姿じゃん！乳丸出しかよw」

さつきの心臓が、どくん、と跳ねた。

(みんな……見てる……。)

さつきは、自分の姿を認識した。ふんどし一枚。そして、それ以外何も身につけていない。胸も、脚も、ほぼむき出しだ。

「今年の娘はええなあ」

「肉付き、結構イケてるじゃないか」

「おっばい、大きめだなあ」

観客として立っている男たちが、さつきを品定めするように話している。その声が、耳に届く。

(やだ……やだよお……。)

さつきは、顔を下に向ける。しかし、それで逃れられるわけではなかった。

「おい、双眼鏡貸せよ！」

「俺も見たい！」

「はいはい、順番に順番に」

双眼鏡を覗いている人が、ちらほらいる。さつきの胸や股間を、拡大して見ているのだ。想像しただけで、体が熱くなる。

「おいおい、静かにせんかい！」

村の若い衆が、声を荒らげていた。しかし、効果は薄い。

「見物客が多いからなあ」

「県外から来たマニアも多いらしいぜ」

「まあ、十年ぶりの儀式だからな。そりゃあ騒ぐよ」

さつきがチラリと群衆を見ると、一瞥しただけで、知っている顔を何人か見つける。同級生のお父さんも、馴染みのスーパーの店長も、その中にいた。いつも笑顔で「いらっしやいませ」と言ってくれる人だった。そんな人が、自分の裸を見るために、ここにいる。

「……………っ！」

じわりと、足元から猛烈な羞恥が込み上げてきた。

「皆様、お静かに！」

長老が、拝殿の前でマイクを持って声を出す。その声は、境内全体に響き渡った。

「皆様、本日は遠路はるばるお越しいただき、誠にありがとうございます。」

長老の挨拶が始まった。観客の声は、少し静まり始めた。

「皆様ご承知の通り、本日はここで、十年ぶりに『ほぐし祓い』の儀式を執り行います。」

「おお……………！」

「ほぐし祓い、生で見れるんだ！」

興奮した声が、そこかしこから上がる。

「これは、村に伝わる神聖な儀式であります！決して、わいせつなものではありません！
神様の御前で、女の穢れを祓い、そして、新たな命の誕生を願う、厳粛な儀式であります！」

長老の声は、ますます大きくなる。熱を帯びていた。

「本日、この儀式を勤めます娘は、小野さつきさん。」

長老が、さつきの方を向いて、手招きした。その動作に、観客の視線が、一斉にさつきに集まった。